様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 20 日現在

機関番号：32702
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2009 ～ 2010
課題番号：21820011
研究課題名（和文） 家譜から見た近世琉球の国際関係と東アジア
研究課題名（英文） The Ryukyu's international relations and its genealogies in early modern era
研究代表者
渡辺 美季（WATANABE MIKI）
神奈川大学・外国語学部・助教
研究者番号：60548642

研究成果の概要（和文）：本研究は、16 世紀末から 19 世紀後半にわたる琉球王国の国際関係を、この時代（以下「近世」と呼ぶ）の琉球に生きた人々の家譜（系譜）を主な史料として考察し、その特質を明らかにするとともに、その特質自体の歴史的意義を東アジア諸地域との比較検討の中から考察しようと試みるものである。この目的に沿って家譜史料の基礎的研究と家譜に記された人物群の概要把握を行い、そこから抽出された人物や事績を用いて、個人史と国際関係の相関性を分析・考察し、その特徴の一端を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research attempts to analyze the international relationships between Ryukyu, China and Japan in early modern era and examine their particular feature and historical significance, mainly based on the Ryukyuan genealogies. For this purpose, I surveyed the Ryukyuan genealogies, extracted the lives of those who were related to Ryukyu's relations with China and Japan, analyzed the correlation between personal history and the international relationships, and then pointed out a part of the feature of the Ryukyu's relations with China and Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,080,000	324,000	1,404,000
２０１０年度	970,000	291,000	1,261,000
年度			
年度			
総　計	2,050,000	615,000	2,665,000

研究分野：琉球を中心とした近世東アジア国際関係史
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：琉球 、家譜、個人史、国際関係、東アジア

１．研究開始当初の背景

近世の琉球は、東アジアの国際秩序の中心的存在であった中国（明、主に清）と冊封・朝貢を媒介とした君臣関係を有する一方で、中国の秩序体系の枠外に独特の位置を築いていた日本（徳川幕府）の支配も受けていた。この日中両国に強く挟まれるという状況ゆえに、琉球は、この二国の影響を様々な形で消化しながら、日本とも中国とも異なる王国としての固有性や自律性を強化していった。すなわち近世の琉球では〈日中への「臣従」〉と〈独自性の強化〉という一見相反する現象が同時に進行していたと言える。

この時期の琉球の国際関係史については、主に政治外交の側面から盛んに研究が進められ、東恩納寛惇『沖縄渉外史』（1951 年）から豊見山和行『琉球王国の外交と王権』（2004 年）まで厚い研究の蓄積がある。私

のこれまでの研究も、どちらかといえば政治外交の側面に重点を置いたアプローチによって琉球の国際関係の特質を読み解き、その近世東アジアにおける歴史的意義を考察するものであった。

こうした中で、近世琉球の国際関係を直接的・間接的に担った個々の人々に着目し、一人一人の個人史の中における国際関係の意味を考察し、その総体―個人史の＜束＞－として琉球の国際関係を捉えるという試みは、全くなされてこなかったといってよい。

一方、沖縄県内には、近世琉球の個々人あるいは各家の歴史を最も詳細に伝えると同時に、王国の政治・経済・外交などの詳細をも如実に伝える貴重な史料群として多くの家譜（系譜）が現存しているが、刊行されている一部の家譜をのぞいて未だ十分に研究に活用されていない現状がある。私は、これまでの研究経歴において数次にわたって各地の家譜を調査する機会を得、その成果を論文「近世琉球の社会と身分－家譜という特権－」（大西秀之・加藤雄三・佐々木史郎編『東アジア内海世界の交流史－周縁地域における社会制度の形成－』人文書院、2008 年）などにまとめてきたが、その中で琉球の家譜が、近世琉球人の生活・人生において琉球の国際関係がどのように関わり、いかなる影響や意味を与えたのかを考察しうる、きわめて豊富な記述を持つ事に気づき、注目するようになった。また家譜（系譜）は、形や性質がやや異なるとはいえ東アジア各地に遍在しており、琉球と他地域との比較研究を行う際に有効な「軸」となり得ることから、これを用いて、東アジア全体を視野に入れることが可能になると考えた。

このような背景から、本研究において「個人史」と「国際関係」の交差という視角により、近世琉球の地域的特質に迫り、さらに東アジア各地域の中で系譜・個人史・地域的特質を比較分析することで、近世東アジアの国際関係の特質を捉え直すことが可能になるという着想に至った。

２．研究の目的

本研究は、16 世紀末から 19 世紀後半にわたる東アジアの国際関係を、この時代（以下「近世」と呼ぶ）の琉球王国に生きた人々の家譜（系譜）を主な史料として考察しようと試みるものである。

近世の琉球は、日本・中国に二重に「臣従」するという複雑な国際的立場を取ることで、日・中の狭間に王国としての地位を維持し、日本とも中国とも異なる地域的固有性を発展させた国家である。本研究では、この時期の琉球の国際関係を直接的・間接的に担った「主体」として個々の琉球人に着目し、その個人史を最も詳細かつ具体的に伝える家譜史料を用いて、彼らの生活・人生において琉球の国際関係がどのように関わり、いかなる影響や意味を与えたのかを考察する。これにより、「個人史」と「国際関係」の相関性の〈束〉として、中・日との国際関係が琉球という地域の中にどのような形で内在化し、その地域的固有性の創成に結び付いたのかを具体的に明らかにしたい。

さらに、この手法によって明らかにした琉球の特性を、近世東アジアにおいて琉球同様に多角的な国際関係を有していた地域（釜山・対馬・長崎・広州など）の特性と比較・検討し、政治外交史とは異なるアプローチによって近世東アジア国際関係の歴史的意義を明らかにしたい。

３．研究の方法

（１）家譜史料の基礎的研究：まず家譜の基礎的研究に力を入れたい。具体的には整理・公開がなされていない家譜を中心に、沖縄県内に残されている家譜を網羅的に調査し、その目録を作成する。またかつて王国内で作成された家譜史料群の全体像を把握し、現存する家譜の位置付けを明らかにする。

（２）個人史の把握：その上で、家譜が現存している人物を、職業や身分で大まかに幾つかのグループにわけ、各グループから数名の人物を抽出して、その人物の家譜を分析する。併せて家譜以外の史料も分析し、家譜の史料的限界を補う。この作業により、それぞれの人物の「個人史」を把握する。

（３）個人史における国際関係の抽出：（２）で明らかにした個人史の中から、近世琉球の国際関係に関わる部分を徹底的に抽出する。その際には外交使者として中国・日本に派遣されたといった直接的な国際関係だけでなく、より間接的な国際関係の痕跡も全て抽出する。

（４）「個人史における国際関係」の意味を考察：各人の個人史において近世琉球の国際関係がどのような影響をもたらしたのかを分析・考察する。また各人の「個人史における国際関係」の〈束〉としての近世琉球の国際関係の歴史的意味を考察する。それは広義には近世東アジアの国際関係の性質分析の一端を担うものである。

（５）東アジアの他地域の場合と比較・検討：（１）～（４）で得られた成果に対して、東アジア他地域との比較検討を行い、東アジア全体における琉球の固有性の意味を考察する。

（６）なおそれぞれの成果は順次、学術論文

および口頭報告の形で国内外に向けて発信する。

４．研究成果

（１）2009 年度は、本研究の目的に沿って沖縄県内各地に残る家譜史料の調査・収集を精力的に行い、基本的なデータの構築に努めた。また調査収集した家譜から抽出した数名の人物の「個人史」と「国際関係」の相関性について家譜を中心とした分析を行った。

家譜の調査は主に、県内最大の家譜収蔵機関である那覇市歴史博物館と、戦禍を免れた豊富な家譜史料を収蔵する石垣市立八重山博物館で実施し、前者からは①日本との血縁的関わりを持つ家系と②対中・対日外交を担った人物を輩出した家系の家譜を、後者からは③本島士族との血縁的関わりを持つ家系と④漂流・漂着などで中国と関わりを持った人物を輩出した家系の家譜を、重点的に収集した。さらに①に関しては鹿児島県南部において、家譜内から抽出した諸人物の足跡を確認するための史跡・史料調査を実施した。

その成果は 2009 年 7 月 5 日に大阪市立大学で行われた国際シンポジウム「前近代中国の中央・地方・海外を結ぶ官僚システム」の第二部「東アジア海域における国際交流と政治権力の対応」にて報告した。また②に関しては成果の一部を 2009 年 11 月 22 日に中国海洋大学（青島）で行われた第 12 回琉中歴史関係学術会議にて報告し、また論文二本にまとめて発表した。

（２）2010 年度は、昨年度に続き那覇市歴史博物館において家譜の調査を行うとともに、収集済みの家譜の分析を行った。また家譜から抽出した諸人物の足跡を確認するため、中国福建省、鹿児島県西南部、沖縄県本島各地において史跡・史料調査を実施した。

その上で、①中国・日本からの移住者を祖先とする家系、②漂流・漂着により外国語を習得した人々の家系、③近世中後期において日本と血縁的関わりを持った人々の家系などについて考察を進め、国際関係に関わる彼らの経歴・技能・資産が、国家の「あるべき国家像」の構築・維持において活用される一方で、彼ら自身も自らの「国際関係」に関わる諸要素を、王国内での社会的上昇のため積極的に利用していたことを明らかにした。また時に彼らの活動が、国家の設定した枠組みを超えて、王国の在り方を「下から」変化させる側面もあったことを指摘した。

こうした成果は、計５本の論文、および二回の学会報告（「韓国＜琉球・沖縄学会＞」・「歴史科学協議会第 44 回大会」）において発表した。

（３）本研究成果の学術的特色は、以下の五点にまとめられる。

第一に、従来、主に政治外交史の側面、ないしは国家や支配者の側から検討されることが多かった国際関係を、それを担った最小の単位であるヒトに着目し、家譜という史料を用いて、「個人史」というミクロな切り口から具体的に再構築しようと試みたことである。二年間という時間的制約から国際関係の全容を家譜から捉え直すことはできなかったが、琉球－中国・琉球－日本の間における漂流・漂着、移住・通婚、外国語の習得や通訳といった形で、「国家」のエッジ（周縁）を担った人々の家譜に焦点を絞り、そこから近世琉球の国家的特質を一定程度描き出すことができた。

第二に、中国や日本といった大国の視点からの研究が主流である近世東アジアの国際関係を、大国を支える「主体」という観点から小国（＝琉球）側に重点をおいて捉え直そうと試みたことである。第一の特色において前述した人々は琉球の「エッジ」をなすと同時に、日本や中国の「エッジ」でもあった。本研究では、彼らの分析を通じて日本や中国の特質にもある程度踏み込むことができたと考える。

第三に、未だ十分に活用されていない家譜という史料に着目して、これを基軸に研究を進めたことが挙げられる。特に八重山の家譜、日本との血縁的関わりを持つ家系の家譜については、極めて網羅的な調査・分析を行い得たと自負している。

第四に、家譜史料の限界を考慮し、二国間・三国間の関係史の分析・考察にあたっては、各国の史料を（いずれかに偏らずに）可能な限り複眼的に使用して、真の意味での「関係史」研究を目指した。家譜は国家に関わる事項のみ記載されるなど様々な制約を持つ公文書である。このため他の史・資料を用いて家譜からは見えない史実を補うよう努めた。特に中国および鹿児島県内各地におけるフィールドワークでは、琉球に関わる様々な史跡・資料の調査を実施し、家譜の記載を大いに補うことができた。

第五に、地域や分野をまたぐ比較研究により各史実の持つ特徴をより浮き彫りにし東アジア全体の中に意義付けようとしたことが挙げられる。具体的には琉球人の中国での拠点であった福州琉球館と釜山の倭館の比較分析や、琉球の地方官と東アジア他地域の地方官の特色の比較などを行った。

以上のような特色と独創性をもつ本研究は、従来とは異なるパースペクティヴを、近世東アジアの国際関係史研究に提供できた

ものと考えられる。但し「国家」のエッジではなく中央に位置した人々―「まぎれもない琉球人」と自他ともに認識し／されていた人々―の家譜の分析が十分に行えなかったこと、東アジア他地域との比較分析が限定された幾つかのポイントに沿ってしか実施できなかったことなど、時間的な制約とも相まって、幾つかの課題が残されている。これらについては、今回収集した史料や、分析済みのデータなどを活用しつつ、今後の課題として取り組んでいくつもりである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 渡辺美季、漂流・漂着と言語－琉中関係のなかの中国語と日本語－、歴史学研究、査読無し、873、2010、pp.2-13
② 渡辺美季、琉球から見た清朝 ―明清交替、三藩の乱、そして太平天国の乱―、別冊・環、査読無し、16、2009、pp.254-261
③ 渡辺美季、琉球侵攻と日明関係、東洋史研究、査読有り、68-3、2009、pp.94-127

〔学会発表〕（計３件）
① 渡辺美季、琉球の自意識と御外聞－対日関係を中心に－、歴史科学協議会第 44 回大会、2010 年 11 月 21 日、中京大学（名古屋）
② 渡辺美季、朝鮮人漂着民の見た 1662-63 年の「琉球」－東アジア海域交流の一側面－、韓国＜琉球・沖縄学会＞。2010 年 10 月 4 日、ソウル大学（韓国）
③ 渡辺美季、科挙与琉球問題、2009 年 11 月 22 日、中国海洋大学（青島，中国）

〔図書〕（計４件）
① 井上徹，他、汲古書院、国際交流と政治権力の対応、2011、pp.259-293
② 荒野泰典，他、吉川弘文館、日本の対外関係 6 近世的世界の成熟、2010、pp.217-234
③ 山本英史，他、汲古書院、近世の海域世界と地方統治、2010、pp.331-378
④ 勝方＝稲福恵子，他、昭和堂、沖縄学入門―空腹の作法、2010、pp.3-21

〔その他〕
ホームページ等
①中国における琉球関係史跡の紹介
http://www.geocities.jp/ryukyu_history/china_ryukyu/Fujian.html
②日本における琉球関係史跡の紹介
http://www.geocities.jp/ryukyu_history/Japan_Ryukyu/Main.html

６．研究組織

(1)研究代表者
渡辺　美季（WATANABE MIKI）
神奈川大学・外国語学部・助教
研究者番号：60548642

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：